

大学入学共通テスト試行調査 2018.11 世界史B

全体概要

制限時間	60分	配点	100点	大問数	5大問
出題分野	古代から現代における通史および社会経済史、文化史				
難易度	※対現行センター試験 やや難				
解答形式	マーク式				
主な特徴	※対現行センター試験 現行のセンター試験で求められた基本的な歴史的事項に関する知識に加え、様々な史料(資料)から適切な情報を導き出す思考力を問う問題が目立った。				

全体出題傾向

◆様々な史料(資料)から適切な情報を導き出すテストへと変化

出題範囲および解答に当たっての必要な知識は、現行のセンター試験同様、全時代・全地域および大半の教科書に記載されている基本的な知識であったが、出題形式は、現行のセンター試験の基本形である「文章中の下線部に関連する正誤判定問題」がほぼ一掃され、全ての問題が地図・文献・グラフなどの史料(資料)に紐付けされて出題された。また、設問数自体は現行の36問から2問少ない34問であったが、思考力を求める問題が中心となったことから解答に要する時間がかかり、受験生は60分の試験時間をフル活用することになると予想される。

対策

◆世界史の「知識」と全ての教科で求められる「思考力」の両方を鍛える

まずは、現行のセンター試験でも求められた大半の教科書に記載されている人名・事件名などの基本的知識を身に付けることである。学習に当たっては、図説などの副教材を活用して各出来事の因果関係や歴史的意義を意識することで「点」である様々な出来事を「線」としてつなげ、世界史という教科への興味を高めたい。また、思考力は世界史に限らず全教科の学習で求められる力である。特別な訓練を行うのではなく、全教科の学習において考察する癖をつけて普段の授業に臨むべきである。

大問別コメント

第1問

AとBは地図を用いた問題であったが、特にAは歴史上の各出来事が起こった場所を地図中から選ばせるのではなく、地図中に示した人の移動の例として適切なものを選ばせる問題であった。Cではカナダの言語事情に関するグラフから、英語とフランス語を公用語とする二言語政策の歴史的要因が問われた。

第2問

Aではポリュビオスの『歴史』についての解説文、Bでは宮崎滔天の『三十三年之夢』の一説が題材となった。特にBの文章は文語体となっており、文章中の空欄に当てはまる適切な語句を選ぶ問題や、著者の活動の内容として適切なものを選ぶ問題が問われたため、文語体を読み解く力が求められた。Cではインドネシア共和国の国章とそれに関連した会話文を参考に、インドネシアの統治方針が問われた。

第3問

交易品や貨幣といった「モノ」の流通に関連する問題が問われ、社会経済史や文化史が出題の中心であった。Aでは中国産の陶磁器がヨーロッパに輸出される一因となったヨーロッパにおける食文化の変化が問われた。Bではインドで流通した三種類の金貨およびそれらについての解説文を史料(資料)として、アジア各地域に関連する知識が問われた。

第4問

絵画や文字史料をもとに世界史上における国家間の関係が問われた。Aでは「複数ある正解の中から1つ選んだうえで、選んだ解答に関連した出来事を年代順に並べ替える問題」といった第1回試行調査でも出題された問題と類似の形式が見られた。Bでは碑文や歴史書に記載されている文章から中国王朝と周辺国家との関係を考察する読解力が求められた。

第5問

「世界史の授業中における先生と生徒の会話」という場面設定のもと、表やグラフといった複数の資料を関連付けて考察する力が求められた。産業革命期におけるイギリスの綿工業をテーマとしたAでは、最大3つの資料を用いてそこから読み取れることと読み取れないことを吟味する問題が問われた。第二次世界大戦後の世界の動向をテーマとしたBでは、為替相場や国際石油価格の推移と歴史上の出来事との関連が問われた。